

健康文化

老い

大滝 礼子

「老い」とは何ぞや。生命の終着駅に近づいたことを知る時か。

この世に生をうけた者は、いつか必ず老いを迎えます。人から年齢を問われ「お年を召されましたね。」「未だお若く見えますよ」と言われると、やはり少しでも若く見られたいと願うのは皆、同じでしょう。

サラリーマンには定年があります。リタイヤすると他人からも「老人の仲間入りをした」と肩書きをつけられ、自分でも老人になった気になってしまうのです。人生には定年はないにもかかわらず。

人の老いた姿は千差万別で、きんさんぎんさんのごとく百歳を過ぎてもエネルギーに自分の人生を歩み続けている人、和歌・投稿・ゲートボール等に熱くなっている人、等々、何か打ち込めるものがあり日々を喜んで過ごしている人がいます。この人達は「若い」のです。

一方、未だ七十歳前なのにもうボケが始まった人もいます。私が見たある例では、ボケ老人の世話をしていた家族が遠方へ転勤が決まり、誰が世話を続けるかという問題が持ち上がりました。結局、どこか面倒を見てもらえる所を探すこととなります。とり残された老人はとても寂しがりやなのです。ボケていても、昔住んだ家と家族のことは、とりわけよく覚えていますし、家族との会話が閉ざされ、ぼんやり外を眺め、息子達が迎えに来た夢を見、枕を持ち部屋中を徘徊し、時として外に出てゆき、皆はうろたえて四方八方さがしまわることになります。ああ、誰もボケたくてボケたのではないのに哀しいですね。

思うに今の世の中、余りにも恵まれ過ぎです。文明の進歩とともに、病気はもとより、人間「一個人」まで分割し、機械の部品のように分別してしまった感があります。「老い」をとり巻く状況もそのところを象徴している一例と考えます。人が本来持っている美しい心、他人の痛みを分かち合える心を忘れてはいないでしょうか。先例以外にも、肉親、親戚、患者さん……と「老い」の実例を真近に見てきた私は、昨今の状態を愁えるばかりです。ただ、このごろ、若い人たちがボランティアに関心を持ち、それを足がかりに福祉への道を志す動きがあることは、現状に差すかすかな光明といえましょう。

どんな人でも、年が明けるとまたひとつ、年をとります。「若い」もそれに合わせて、好まざるともやってきます。私も例にもれずです。これからは、「若い」心を持ちつつ、一年一年をすごしたい、自分自身を見つめつつ、人生のフィナーレに向かっていきたいと思えます。

(開業医)